

梶原正昭著『軍記文学の位相』

信太 周

この書評をお引受けして、故梶原正昭氏云々と書き出すことになろうとは思ひも寄らぬことであつた。

平成十年九月二十三日、梶原正昭氏ご逝去。わずか半年前、古稀を迎えられての定年退職を機に、ご自身執筆の「七十年の軌跡」・「古典文学における創造と享受」を巻頭にして以下、同門・門下の方々の献呈論文四十七篇を取めた大冊の記念論集『軍記文学の系譜と展開』（汲古書院刊、三月）を刊行、そして、古稀の節目に、第一論文『軍記文学の位相』（汲古書院刊、三月）、第二論文『平家残照』（新典社刊、四月）と間をおかぬ上梓——確かに、「鹿の谷事件 平家物語鑑賞」（武蔵野書院刊、平成九年七月）あとがきに、〈この書の大半は病室で書かれたものである。（略）幸いにして経過は良好で秋には退院を許され、その草稿に手を入れることができるようになり、ともかくもこうしたかたちでまとめられたのは、まことに幸運であつたと思う〉と書き留められ、また、「七十年の軌跡」最終項、平成九年欄に、〈病後の経過は良好であるが、軽微ながら抗ガン剤の副作用に悩まされ、また摂り得る食事が平生の三分の一に過ぎないため体重が二十キロ減少し、四十キロに落ちる〉と淡々と記されていたことであるが、最終講

義につき、「平家物語」巻九「越中前司最期」をとりあげ、そのいくさ物語としての展開、およびだまし討ちをめぐる問題を中心に、これを戦争論との関連から論述した」とあるのをうかがえば、大患癒えられたと思ひたくなるというもの。訃報間もなく、新出源平合戦図屏風の合戦場面の同定につき、〈メトロポリタン本の図録『保元平治合戦図屏風』（昭和六十二年・角川書店刊）の解説者の一人である梶原正昭氏にお願いして目下検討していただいている〉（辻惟雄「源平合戦図屏風」、「国華」一二三六号、十月）との記事を目にしたが、確かに、梶原氏にお聞きしておくべきことは多々あつたことと悔まれてならない。心からご冥福をお祈りする。

それにしてもご闘病さなかの精進——構成・解説担当「絵で読む古典シリーズ 平家物語——栄華と滅亡の歴史ドラマ」（新装第一刷、学習研究社刊、五月）、ご論文「平家一門——嫡流と主流」を収めての編著『平家物語 主題・構想・表現』（軍記文学研究叢書6、汲古書院刊、十月）、そして遺著となつた『頼政挙兵 平家物語鑑賞』（武蔵野書院刊、十二月）と拝読するにつけ、かくも集中して研究に取り組めるものかと、ご覚悟のほどには肅然たる思いがする。

ところで、『軍記文学の位相』は、（ひとつの作品に限定するより、そのジャンルとしての展開を明らかにし、軍記の全体像をとらえることに心が向かい、そうした姿勢でとり組んできた）（あとがき）と記すように、室町以後の後期軍記については別に一書をなす予定として収めていないが、古稀記念論集『軍記文学の系譜と展開』の課題を一身に体现された論文集と評すべきであろう。

膨大な数の既発表論文のうち選び出された二十五篇——収録にあり、区分は設けず連続して読まれるべきことを企図しているが、目次では六章仕立てになっている。ちなみに、その配列、論文題目は次の通り（紙幅の都合、副題の大方は省略した）。

軍記研究の出發／五十嵐力博士と軍記研究／合戦状と戰場記／功名譚の系譜／軍記文学形成の一基盤／軍記物語の擬声語

『将門記』の成立／『将門記』の構造（一）／『将門記』の構造（二）／『将門記』の変容説話覚え書

合戦伝承／武人説話の展開／『保元物語』の世界／いくさ物語の絵画化

『平家物語』語り本に見る原態のおもかげ／『平家物語』の一考察（一）——「鹿の谷」と白山事件／『平家物語』の一考察（二）——「橋合戦」をめぐる史実と文学／いくさ物語のバターン／軍僧といくさ物語／武人の罪業感と発心／『平家物語』受容の様態

『平家物語』と『太平記』／『太平記』序章に関する覚え書
鬼一法眼譚の背景／伊勢三郎譚の展開／『義経記』覚え書

——宇陀地方と義経伝承

明治期文学史研究を博搜して、〈軍記〉というジャンル名の初出が上田万年著『国文学』（二三頁の年表では明治一五年の項に入っているが、前々頁に記す通り、明治三年刊が正しい）であることの確認を手始めに、以下目次に明らかなように、軍記物語の数々——論題には顕でなくても〈衆口之話〉に触れて『陸奥話記』や『奥州

後三年記』への言及（二九六頁以下）、『義経記』を論じて『平治物語』諸本の表現にまで及ぶこと（四六二頁以下）、他に『承久記』を評して『太平記』への道をひらく先駆的な作品として位置付ける（四三八頁以下）なども散見し、数えあげてみると主立つ軍記物語全てにわたる整然とした構成であるのは驚異である。しかも、その課題解明は〈注釈作業の中でふと気づいたこと〉（二六七頁）が常に基点をなし、事実、これら軍記物語の全てについて注釈作業を完成させているあたりは梶原氏ならではの独擅場であろう。注釈作業に発する精緻な分析が単なる考証にとどまらず、再び鑑賞に還元されること——その結実の典型を『平家物語』鑑賞講座として企図された『鹿の谷事件』『頼政拳兵』に見る。この両著は、確かに、早い時期のご論（『鹿の谷』と白山事件）及び『橋合戦』をめぐる史実と文学」に発する究極の『平家物語』鑑賞にして、梶原氏の敬愛・傾倒のさま顕著な先師五十嵐力博士の提唱する〈創造批評〉、すなわち〈批評その物が、批評される創作と同じく一種の独立した芸術的創造となるもの〉（三〇頁）を志向——文学研究の醍醐味とは何かが感得させられる仕組みになっている。

文学研究にあつて、対象とする作品の評価は避けて通れない課題であろう。『日本文学の歴史』刊行開始に際し、著者ドナルド・キーン氏は、〈一番楽しかったのは、これまでいわれているのとはちがった再評価ができたこと。たとえば軍記物は平家物語が一番いいといわれる。けれど低くみられている保元物語、平治物語、そして明徳記など実に面白い。こんな発見をして、自分の

特徴が出たと思います」と語っていた。随分率直な物言い——ただし、文学作品の序列付けなど分析して分析しきれぬものではないということであろうか、この問題提起に対する直かの論評は未だ目にしたことがない。梶原氏も、『太平記』の文芸的な特色のひとつは、感傷をまじえぬ冷徹な目で対象をとらえ、リアルにそれを描出する叙事的な筆致にあるといつてよい」とされても、
「この二人の武將（木曾義仲と新田義興のこと）の死の描きかたの差の中に、『平家物語』と『太平記』とのそれぞれの特徴が、よく示されているといえよう」（『平家物語』と『太平記』——その合戦叙述をめぐって）と、『平家物語』か、『太平記』かなど何れと軍配をあげることは控えている。

もつとも、『平家物語』を中心にその前後の諸作品について書いたものを拾い、配列し、『軍記文学の位相』と題することにした（あとがき、最終講義で取りあげられたのも『平家物語』（「越中前司最期」）、そして何より、旧臘、梶原正昭先生を語る会での奥様のご挨拶——『頼政挙兵 平家物語鑑賞』につき、〈大学の内外を問わず、『平家物語』の享受普及に終生情熱を傾注してきた故人にふさわしい遺著となったように思われます〉（梶原育子氏）と記されているのを拝するにつけ、梶原氏の『平家物語』に寄せる肩入れのほどはなみなみではない。その点、「いくさ物語のパターン——「那須与一」の章段を例として」は、『平家物語』の表現の特質を論じて、リアルな表現とは対極にある様式美の完成と規定された注目すべき論文である。後に、「いくさ物語の形象とパターン」（新日本古典文学大系『平家物語 下』解説）でも、

〈名寄せ／装束描写／名のり／つわものの資質／古つわもの／功名争い／いくさ語り〉に分けて詳述再説されたことであるが、典型的なパターンと認められる表現が、異本化作用のなかで完成することを抽出して、

かなめぎわを射ぬかれて空高く跳ねあがる扇、弧を描いて海中に落ちる鎧矢。（略）その描写はこまかく印象的で、劇的な感動をもりあげるようなはなやかな描きかたになっている。屋代本がただ「風」としているのに対し、覚一本では与一が扇に向かう場面では荷酷な試練の「北風」、首尾よくこれを射当てたこの最後の場面ではその美技を称揚するかのようにな「春風」と描き分けており、一種の感情移入を見せていることも興味ぶかい。

と論ずるあたりは、〈創造批評〉さながら、『平家物語』の興味を伝えて余りある行文である。

ところで、『平家物語』鑑賞にあたり、梶原氏は、〈一般の読者にとつては、世に広く普及して歌舞伎や浄瑠璃などの後世の文学に大きな影響を与えたこの流布本の方が親しみやすく、参考になることが多い云々〉（「鹿の谷事件」はしがき）との観点で、元和七年刊整版本を定本として扱っている。確かに、異本化も終息、かつ印刷本として広く享受された流布本を重用するのは一つの見識として認められよう。ただし、高野本で、〈与一（略）切斑の矢の其日のいくさに射て少々残たりけるを〉（「那須与一」）と描かれる与一の晴れの場面が、流布本では「二十四」とある截生の矢負ひ）と異本化していること——梶原氏校注『平家物語』（桜楓社

刊」は脚注校異欄で立ち所に一方流諸本の異本化過程をたどることのできる労作であるが、この表現の差異をめぐる分析は大きな問題をはらむ。矢を背負い、主君の前で威儀ただす場面とあれば、常に「二十四さいたる云々」で様式美の完成と受けとめるべきか、あるいは、(ややもすれば類型化し迫力に欠ける諸軍記) (五五)

新刊紹介

梶原正昭・山下宏明 校註

『平家物語』(一)

古典文学を研究する者にとって、新日本古典文学大系(新大系)は必携の書である。本書は新大系「平家物語」を文庫化したもので、(一)には巻三までが収められる(全四冊刊行予定)。内容は新大系のままであるが、本文と注が見開き一頁に収められており、文庫の方が見やすくなっているように思う。

巻末には、天皇系図・平氏系図および山下氏による解説「琵琶法師の『平家物語』が付されており、作品理解の助けとなる。山下氏の解説は、『平家物語』諸本の生成・享受や盲人琵琶法師の語りと文字テキストの関係などを通し、底本(高野本)の位相を示す。そこには、現在の研究が簡潔かつ的確にまとめられており、『平家物語』を学ぶ上での有難い手引きとなっている。

新大系の文庫化により、良質のテキストが広く一般の手に届くようになることは間違いない。本書の刊行の意義はそういう点にも認められよう。(平11・7 岩波書店 A6判 三三八頁 八〇〇円)

〔和田琢麿〕

奥田 勲・岸田依子
廣木 一人・宮脇真彦 編

『新撰菟玖波集全釈』第一卷

「座」——人々が集う場——について、その重要性を今更説く必要はなからう。連歌は「座の文芸」とも称される韻文学作品である。

本書は、代表的連歌集である『新撰菟玖波集』の全釈書である(全八巻別巻一刊行予定)。第一巻には、序および、巻第一―三が収められている。注釈は、語釈・現代語訳・付合・備考の四項目からなる。各注釈とも、関連する和歌を引用するなど詳細に行き届いたものとなっているが、特に、付合一句と句の連鎖の注釈には力点が置かれている。付合こそが連歌の最大の特質という認識によるものである。また、統刊予定の別巻には作者索引や歌語・注釈語索引などが収められることになっており、本シリーズの刊行により連歌研究が大きく前進することは間違いない。

近年、連歌を中心とした「座」における文学・文化が注目されていること(例えば『国文学』1998・12)の特集に端的に示されているよう。本書の刊行は、まさに時機を得たものである。(平11・5 三弥井書店 A5判 三三三頁 八五〇〇円)

〔和田琢麿〕

頁のような類型に堕した表現と受けとめるべきか——『平家物語』の表現美を抽出してパターン化した表現と論ずる際のこの危うい境界、梶原氏ならいかに読み解かれるところであろうか。(一九九八・三 汲古書院 A5判 五〇〇頁 一二〇〇〇円)

中野幸一校注・訳

『新編日本古典文学全集14 うつつほ物語』

本書は、『うつつほ物語』(俊藤卷・吹上下巻)の、頭注・本文・口語訳を備えた入門・研究書である。底本は最善本とされる尊経閣文庫蔵前田各筆本二十冊を用いる。巻頭に、煩雑な登場人物の関係性を明確にした「系図」や、冗漫な記録態度に対応した「見出し」を設けるなど、この物語の特徴に即した工夫が随所に見られる。また、一千首余りの和歌全てに口語訳をつけたことは本書が初の試みであり、幅広い利用者の要求に応えたものになっている。頭注は前後関係が常に意識されており、物語を立体的に把握することができ、段落間の解説部分には、物語文学の諸問題が取り上げられ、「物語相互の合成」を経た長編物語成立の想定等、筆者独自の研究成果も盛り込まれている。

まだ模索段階にあるといわれる『うつつほ物語』研究に新たな進展を与えるものとして本書刊行の意義は大きい。(平11・6 小学館 B5判 五七三頁 四四五七円)

〔岡田則子〕